JCNC 公開学習会　R4 年度第 1 回（2022 年 7 月 2 日）
記録

大山：　2022 年度第 1 回の日本子ども NPO センターの公開学習会となっています。皆様お集りいただきありがとうございます。つい先日、6 月 15 日に子ども基本法、子ども家庭庁関連法案が通ったということもあり、子どもをめぐる環境も変わってきているかと思います。そうした中で、今回と次回、子ども・若者の声をテーマに学習会を開催しようと考えており、子ども・若者たちの声に私たちがどのように向き合っていけるかを考えていくようにしたい。今回はその第 1 回で、報告者にお二人、特にメインでお話しいただく方として、こおりやま子ども若者ネットの櫻井さんにお願いしています。現在、福島県郡山市で子ども・若者に寄り添う活動をされていますし、元々は東京都世田谷区で活動されていて、私とは世田谷のときに面識があって、今回お願いをすることができました。もうお一人は埼玉県入間市で子ども・若者支援の取り組みをされている村野さんにお願いしています。全体で 3 時間という長丁場になりますが、最後までご参加いただければと思います。では早速ですが、櫻井さんお願いします。

櫻井：　よろしくお願いします。「＜子ども真ん中社会＞の実現をめざして‼～子ども・若者たちの声を聞いてみよう～」というのがお題だったので、それに沿ってお話しをさせていただきたいと思います。福島県郡山市で活動しています、こおりやま子ども若者ネットの櫻井と申します。皆さんよろしくお願いします。

最初に、櫻井って何者だって皆さん思うんじゃないかと思うので、自己紹介から。僕のあだ名は“もんごー”といって、普段子どもたちや若者たちからはもんごーって呼ばれています。僕の活動のテーマは〈若者の余暇、参加・参画、社会的包摂〉で、これをテーマに活動するユースワーカーです。ユースワーカーとして、若者と関わり合いながら社会をつくっていく、考えていく、自分たちの余暇を豊かにしていく、そういうことを一緒にやっていくような仕事をずっとやってきました。大学は法政大学のキャリアデザイン学部を卒業しまして、専攻は青少年社会教育で、佐藤一子先生のもとで御指南いただきました。資格としては社会福祉士と、このキャリアデザイン学部で独自に作っていた地域学習支援士、あと社会教育主事課程を修了しています。今年中に社会教育士を名乗れるように講座を受講しようかなと考えています。

現在は福島県郡山市で活動していますが、後で詳しくご説明します。過去にはいろいろな任意団体とか、学生で NPO をつくったりとか、ユースセンターで働いたりとか、あと世田谷区の子ども青少年協議会、他の自治体では青少年問題協議会と言われることが多いかと思いますが、その委員をやらせてもらったりしていました。僕の原体験ですが、小中高校生時代は世田谷のジュニアリーダークラブで活動したり、児童館で活動したりして、キャンプファイアーに情熱を注いでいました。その中で 2010 年、当時高校 3 年生くらいでしたが、二つの活動を始めました。一つは、世田谷区で子ども・若者会議を設置することになったので、ユースミーティング世田谷というものを始めました。といっても僕が現役で活動できたのは 1 年だけで、あとはサポーターやコーディネーターみたいな役割で関わっていたんですが。（写真を見せながら）これは真面目に会議してるようで、女子高生がソースせんべいを一生懸命食べてるだけなんですけど。地域のお祭りでアンケートしたりして、世田谷区に提言したりとか、そういうことをやっていました。あともう一つは、児童

館やジュニアリーダーで出会った仲間たちと一緒に任意団体をつくって、キャンプの活動とか、子どもの居場所としての駄菓子屋を商店街の中で運営したりしていました。

それで 2012 年くらい、大学 2 年くらいだと思いますが、ユースミーティング世田谷の中で、世田谷区の保坂区長との意見交換会を 1 年に 2 回やって、1 回目で保坂区長がユースミーティング世田谷の高校生たちから大顰蹙を買うんですよね。保坂区長が当時話したい話題を一生懸命話して、「これについてみんなどう思う？」とかやるんですけど、「いや、それは私たちが話したいことじゃない」って、当時の高校生から大反発があって、じゃあもう一回やりましょうってなって。そうした中で出てきたのが中高生世代の日常的な居場所であったり活動拠点であったりが必要だよね、欲しいよねって意見で、高校生たちと提言していたところ、世田谷区の方から、それだったら場所があるから自分たちで運営してみてよ、みたいなお話があって、そこで高校 3 年から 26 歳くらいのメンバーで構成した NPO 法人せたがやっこ参画推進パートナーズっていう団体を設立しました。1 年間のモデル事業だったんですが、中高生の居場所づくりに取り組んでいました。その結果、世田谷区でも中高生や若者の拠点づくりをしていきましょうってお話になって、青少年交流センターっていうものが設立されることになるんですね。その青少年交流センターを受託した NPO 法人文化学習協同ネットワークっていうところに就職して、世田谷区立野毛青少年交流センター、元青年の家だった施設で働いていたというのが、4 年前までの話です。

2018 年 4 月に福島県郡山市に移住しました。今の活動はこおりやま子ども若者ネットという、郡山市内で子ども若者に関わる活動や仕事をしている団体や個人が集まっているネットワーク組織です。こちらは、生き方工房 necota という、20～40 代を中心とした若者の余暇と学びの場作りをやっています。あと、対話の場作りとして「シェアする学び場」っていうのがあって、みんなの得意分野についてシェアし合ったり、例えば政治で市長選について話し合ってみたりとか、そういったこともやってたりします。そしてもう一つ、こっちが飯のタネなんですが、スクールソーシャルワーカーもやっていて、教育委員会に配属されています。僕の場合は小中学校が担当で、校内福祉の取り組みを行っています。多いのは不登校、貧困、障がいだったりとか、そういうのに関する相談・援助の仕事を週の半分くらいやっています。残りの週半分で他の活動をやっています。

早速ですが、郡山市ってどこかわかりますか？　（地図を表示して問題形式）皆さん流石ですね、（福島県の中心付近の）ここが郡山市で、左上に見えるのが猪苗代湖という大きな湖があるんですが、海に行くより湖に行く方が近いので、これからの時期は、郡山市民にとっては湖水浴がレジャーの定番になっているようです。人口は約 33 万人、いろいろな地方自治体も同じ状況かなと思いますが、若者世代の流出が課題になっています。ただ人口はそこそこいて、あと商業都市なので、転勤などで入ってくる人が結構いるんですね、なので若者が流出しているということに行政として危機感があまりない状況になっています。あと合唱が盛んで「楽都郡山」と名乗っていたりもして、NHK 合唱コンクールとかでも郡山市の学校が名を連ねることも多いかなと。あと鯉の生産量が全国 1 位です。皆さん食べたことありますか、ぜひ食べてみてください。

僕と郡山の紹介は以上なんですが、良ければ皆さんのことも教えてください。お名前や、あとご所属があれば。あと学習会の参加動機とかも教えていただければ、それを意識しながらお話しできるかなと思います。チャットの方に書いていただければと思います。はじめましての方やお久しぶりの方等、様々な方が来ていただいていてうれしいです。（少し時間をとる）

では話を進めさせていただきます。こおりやま子ども若者ネットという団体がそもそもどんな団体なのかという話からしていきます。我々のテーマが「社会的排除を解決するために」で、郡山市内の子ども・若者に関わる団体・個人が集まっていて、今は 33 の団体・個人が関わっています。様々な団体がいますが、就労支援をしている団体や、子ども食堂、発達障がいに関する相談支援をしている団体、チャイルドライン、性教育をしている助産師さんとか、皆さんそれぞれに様々な活動をしている人たちが集まっています。大きい団体もあれば小さい団体もあり、自分たちの活動だけでは解決しきれない課題に突き当たることもあります。そういうときに繋がりながら、課題解決をしていきましょうというのがこおりやま子ども若者ネットの動きになります。加盟されているリストの中には議員さんなんかもいらっしゃいます。団体の活動目的として『子ども若者に関する社会的排除を解決し、子ども若者の「参加」「自己実現」「多様性」を尊ぶ地域社会を実現する』ことを掲げています。そして僕たちは、子ども若者を支援や育む対象として捉えるだけでなく、この地域社会の構成員として、彼らの「参加」を共に実現する仲間として協働していく事を大切にしていますが、今日のテーマにもある、「子ども若者の声を聞くってどういうことかな」という問いについて、ここにまさに僕らのポリシーとして書いてあるかなと、こういうことを大事にして活動しています。

じゃあ具体的には何をしているのかについて、まず車座会議として加盟団体の実践報告や、地域課題について一緒に考えていくような会を開いています。ときには市長や議員の方も交えて一緒に議論をするということも、これまでやってきています。最近はオンラインとのハイブリットも当たり前になってきましたね。あと、テーマ別学習会として、様々な団体や個人が加盟しているのでそれぞれの関心がありますから、例えば加盟団体の皆様に自分たちで企画を立てていただいたりして、それぞれのテーマで学習会をやっていただいて、加盟団体みんなで共有するということをやっています。ただこれは、加盟団体だけではなくて、加盟団体外の方もご参加いただけるものなので、今後もし関心があればご参加いただければと思います。これまでにはセクシャルマイノリティをテーマにした会とか、スウェーデンのユースワークの専門家を招いた会が開かれました。あとは郡山市に対するロビー活動とか、あるいは一般市民に対する啓発活動とかをしています。活動として大きかったのは、公開質問状の作成を加盟団体の皆さんと一緒にやったりしました。

それで、ここからが今日のテーマなのかなと思いますが、若者の活動拠点づくりということで、高校生世代のフリースペースとしてすきま cafe というのを週に一回実施しています。これは加盟団体の NPO 法人ビーンズふくしまと協同で開催しています。我々は「参加」を大事にしているので、月に一回「来月何する」「どんなことしようか」とかを話し合う機会を設けています。普段はカードゲームで過ごすなど、自由にしています。話し合いの中で生まれてきた企画もたくさんあって、例えば餅つきはコロナ禍の中でどうやってやるかをみんなで考えて、炊飯器の中で直接つくることにして何とか乗り越えました。あとは駅前にテントを出して、屋外に居場所をつくるとかもやりました。この他に学校の中に若者の拠点をつくる活動もしています。今年度は市内二校でやっていて、もちろん単純な居場所づくりとしての文脈もあるんですが、学校からリクエストが多いのが総合的な探究の時間のサポートで、彼らの声を大事にしなければならないという思いと、要請された探求学習をしなければならないというところのバランスがとても難しかったりしますが、試行錯誤しながらの取り組みを学校内でもやっています。あとは若者の声の社会化につながる取り組

みとして、これも学校でやったものですが、シティズンシップ出張講座を実施しました。それと、若者の声の社会化としてもう一つやっているのが若者会議です。子ども若者の参加を大事にする意味で、この町のこと、子ども若者のことを、子ども若者を抜きにして考えない、必ず子ども若者と一緒に考えるということを大事にしています。昨年度は石巻市に訪問して、ユースセンターやプレーパークの見学もしました。昨年度のメンバーは、この若者会議の活動を通して市長とディスカッションしましょうという企画を実施したりもしました。その際のテーマが「若者と地域がつながり地域が活性化するフリースペースづくり」や「子ども若者中心の地域づくり」「みんなでつくるプレーパーク」等になっていて、パワポ形式や紙芝居形式等、様々に発表していました。今年は第2期としてスタートしていて、去年の方針を引き継いでいる「こおりやま広域圏探究コース」と、現在週一回子ども食堂の団体から場所を借りているフリースペースをもっと常設的に活動拠点プラス地域の大人も含めての共有地を作っていこうという企画が「こおりやまユースセンタープロジェクトコース」としてスタートしています。先日第 1 回の活動を終えたところで、これからさらに深めていければと思っています。

子若ネットについてはひとまず以上です。では次に、「なぜ子ども若者の声を聞く必要があるのか」ということなんですが、これについては参加者の皆さんにとって当たり前と思われるかもしれませんが、確認をしておきたいと思います。まず大事だと思っているのは権利としての視点で、子どもの権利条約をはじめ、各地で条例もできてきています。条約の基本的な 4 つの柱の中に「参加する権利」があって、意見表明権等が含まれています。子ども若者が声を発することがそもそも権利なのだから、それを守っていくことには大人や地域社会、自治体や国には責任がありますよね、というのがあります。子どもの意見って、原文では“the views of the child”と書いてあって、opinion ではなく view、視点ですよね、声が声として発信されているか否かに関わらず、その子が持っている視点が「子どもの声」であるということを、我々は常に立ち返って認識しなければならないと思います。「声」って何か、発せられた言葉なのか、日常的な活動の中で出てくる言動や創作したものとか、声っていろいろあると思うんですよね。それらを含めたものとして“the views”という表現があるんだろうなと思います。

もう一つ大事にしているのが「社会的排除」の視点です。排除の概念には経済的次元・社会的次元・政治的次元があるとされますが、様々な次元で社会的排除が進んでしまうと、社会的に弱い立場にある人、子ども若者もまさにそうした存在ですが、そうした人が意思決定から排除されてしまう状況が生じます。そして弱者の声が届かないと社会的排除がさらに進行することになり、排除がどんどん進行してしまうということが社会の中であるかなと。なので、社会的排除の状況にある人と一緒に社会づくりをしていくことで、若者の包摂をしていく必要があるのではないか。これが、僕たちが考える、若者の声を聞くことの意義になります。

欧州若者白書（White Paper on Youth）には、「ともかく、若き欧州人にはいいたいことがたくさんあるはずだ。彼らこそ、経済的変化、人口のアンバランス、グローバリゼーション、文化多様性によって、主たる影響を被っている、まさにその人たちである」と書いてあります。例えば今のこのコロナ禍で、子ども若者が悪影響を被っている割合は非常に高いなと感じます。多様に、しかも非常に早く変化している社会の影響を被っているのは子ども若者なのですから、子ども若者とともに社会をつくっていかなければ、社会そのものが成り立たなくなってくるのではないかとい

う懸念すら出てきます。なので、若者の声を聞かない地域社会には未来があるのかとさえ思います。その意味で、子ども若者の声を聞くことには大きな意味があるはずです。

ここで、僕自身が小中高校生の頃に感じたり、あるいは活動していく中で感じたりした、なりたくない大人 10 選をあげてみたいと思います。これは自戒を込めながら書いたのですが、つまり社会的排除をもたらす要素は日常の中にたくさんあるということであり、その要素につながる大人の姿を紹介したいということです。まず、「①すぐ評価する大人」です。「すごいね」とか「もっとこうしたら」とか、まだ活動が温まっていなかった場合でもすぐに良い悪いを判断したり、修正を求めたりする、そういう大人にはなりたくないなと思います。次に「②教えたがりの大人」ですね。評価とも重なりますが、すぐに教えようとする。こういう大人に対して、自分が若者のときはイラっとして「そうじゃなくて自分はこうしたいんだ」と思ったりしました。「③ありのまま信者の大人」というのは、居場所の中で「ありのままで良いんだよ」とよく言われるし、それは居場所づくりの基本でもありますが、その本質をとらえられないと、「本当はこうしたい／こうなりたい」という若者自身の発達欲求を無視して、「そんなにがんばらなくていいんだよ」みたいに、一方的なありのままの姿を強制されるようになってしまうことがあります。「④シナリオ通りに言葉を引き出そうとする大人」は、例えば若者の意見表明の機会とかでありがちですし、シンポジウムとかでも「この人こう言って欲しいんだな」と思ってファシリテートしてる人とかもいます。「⑤若者の声を利用しようとする大人」ですが、この前の衆院選のときに、ある政治家の関係者から若者の声を聞かせてほしいと言われたことがあって、それ自体はうれしいことなんですが、気づいたら「今忙しいので直接ではなく、若者の質問を出してもらってそれに YouTube で答えるのはどうか」と言われたんですね。あれ、若者の声を聞きたかったんじゃないの、若者の声を宣伝の材料にしようとしているように感じたことがありました。「⑥労働力として搾取する大人」、よくボランティアと言われますし、それ自体は良いことでもあって、僕もボランティアを通して成長してきたかなと思うんです。でも、若者を募集するのは良いんですが、例えばお祭りとかで募集したとして、翌年のお祭りに向けてこの辺を一緒に考えてみようという感じの機会がないとか。労働力としては活用するけど意見は聞かないという感じですね。「⑦自分が若いころと比べたがる大人」は、悪い意味で言うと「自分の頃はこうだったのに、今の若者はできないのか」とか。でも、良い意味で使ってるときもモヤっとするんです、「自分が高校生の時はこんなことできなかったよ」とか、その比較にどんな意味があるのか今でもわからないです。「⑧失敗しないように誘導する大人」、プロジェクトとか一緒にやっていくときに、失敗しないようにああしなさいこうしなさいと言われる。指示的に関わる場合ですね。「⑨知らないうちに勝手に決める大人」は、代表的なものが校則だと思っています。知らないうちに決まっていて、それを変えることもできない、嫌だなと思います。「⑩声を聞くだけ聞いて何もしない大人」は、意見表明の機会を作っても聞くだけ聞いて何も動かない、その声をわずかでも実現できるような継続的な関わりを持たないで、聞くだけで終わってしまう大人ですね。僕自身、これが全部できているかと言われると不安になりますが、こういうことを意識しながら活動していきたいなと思っています。そしてこういうことが起こると、子ども若者が参加の機会から排除されてしまうと思います。

では、子ども若者の声はどうしたら聞こえるのかを考えたいと思います。端的に示すと、「(日常＋機会)×声＝多次元の意見表明機会保障」につながるんじゃないかと考えています。まず「日常」

というキーワードですが、僕たちは子ども若者の声を聞こうとしたときに、どれだけ日常が大切かを考えさせられます。さっき話したように、月に一回若者たちと一緒に、来月どんなプロジェクトをしようかと話し合う機会を設けていて、それは意見を聞く機会になっているんですが、それだけだと絶対に声は生れないんです。日常の中で若者たちと、話したり遊んだりして関係性を作っていく中で、「こういうことをやれたらいいな」という思いが出てくるのであって、最初から「こういうことやりたい」とか「もっと社会がこうだったらいいな」みたいな声がある若者はなかなかいないんです。だから声を一緒に紡いでいく取り組みが必要なわけで、その意味で「日常」がどれだけ大事かということが感じられるのです。例えば、ゲームでケンカする小学生の姿は、現場ではあるあるだと思います。ゲームで負けた人は交代というルールで、弱い人から不満が出るわけです。強いとずっとできるけど、弱い人はすぐ交代になるので強くなれない。そういうところから不満がでて、ケンカにつながるわけです。そういうときにユースワーカーや関わる大人が、ケンカは良いけど、何が要因になっているのかを一緒に考えて、ルール化して解決できるならそれも一緒に提案して考えていけるようにしていくわけです。ゲーム一個で始まるルール作りもあるんです。あるいは勉強場所を確保したい受験生が、通常モノを配置できない階段の踊り場で勉強したいと言い始めたりもしました。静かな勉強部屋もあるんですが、ちょっとザワザワしてた方が勉強しやすかったようで、それも本人と話しながら、「じゃあこうできたらいいな」を日常の中で一緒に考えました。あとは、ちょうど 18 歳選挙権が始まった年には、日常の雑談の中から、どこに投票したらいいのかという高校生の悩みに向き合うことがありました。じゃあみんなで考える機会を作ってみようということになって、みんなで資料を持ち寄って考えるプログラムにつながっていきました。だから、いきなり「皆さんの声を聞かせてください」ではなくて、日常の中でいかに声を紡いでいくかが大事だなと思っています。

あとは、声の本質をとらえるということも大事かなと。例えば「ねぇねぇ、漫才やりたい」と言ってきた子どもがいたときに、僕の脳内翻訳で「自分のアイデアを活かしたことがやりたい」って言ってるんだなって思ったんです。何でそう思ったかといえば、日常の中でそういうことをポツポツ言っていたからですね。彼は当時 10 代後半でしたが、学校や就労などの社会的なつながりがない状態で、これからどう生きていくかを悩むことが多かったんです。ただ、これを脳内翻訳したからといって決めつけるわけにはいかないので、「何で漫才やりたいの」と聞いていくことになるんですが、そうするとだんだん辻褄があってくるんですよね。そうするとこのときは、自分のアイデアを活かしたいという思いは確かにあったんですが、同時に漫才をやったらクラスの人気者になれるんじゃないかと思ったんだと話してくれたわけです。ただ、話していく中で、漫才である必要はないなということになってきて、結果彼は小説を書くことになりました。実は今まで一個のことをやり遂げるという経験がなかったんですけど、このときの小説は見事にやり遂げて、本にしてイベントで配布するところまでやりました。あと、「俺も居場所づくりやりたい」という声もよく聞くんですが、これは僕の中では「学校でも家でも進路どうするのか聞かれてうんざりする。このままこの場所に居続けられたらいいのに…」と脳内翻訳されました。これもまた「え、何で？」から話していって辻褄合わせをしていくんですが、進路とかこれからの就労が見えてこない状態で不安が大きい中で出てきた言葉かなというのがだんだんわかってきて、これから進路選択どうするのかを継続的に相談していこうねということになりました。こうした脳内翻訳は決して決めつけ

になってはなりませんが、日常の関わりがないとそもそもそういう、この子が本当に言いたいことは何だろうかについての想像もできないですし、今目の前の人が言っている言葉にどんな背景や思いがあるのかがわからなくなって、受け取りにくくなるよなと思うんです。

それから、もう一つのテーマとして、その場の一員として、一緒に考えて一緒につくるということを子若ネットでは大事にしているんですが、ときにはユースワーカー自身に影響力があることも自覚して考えていかなければならないなと思います。例えば、中高生の居場所を作っていたときに、首長から直々に将棋大会をやれと指令が来たことがあります。ここは議論が分かれるところかなと思いますが、若者がやりたいことではないのでと突き返すことも出来なくはないと思います。また、背景にこういうことがあるということは、若者は知らない方が良いと考える人にも会ったことがあります。でもこの時の僕は、みんなに相談しました。「首長からこんなこと言われたけど、どうする？」て聞いたら、みんなは「まぁやってあげてもいいんじゃない」くらいで、ワーカーも困ってるしって言ってやってくれたんです。そしたらやってるうちにだんだん楽しくなって、段ボールで巨大将棋盤作ったりもしたんですけど、大会が終わってからしばらくは将棋ブームが起こったりもしました。結果がどうなったかというよりも、そのプロセスにおいて、こちらが勝手に課題を解決するのではなく、みんなと対等な立場で課題感も含めて共有していくということが大事だったかなと考えています。

あともう一つは、作戦会議で出てくる「スタッフはどう思うの！？」という子どもたちの言葉ですね。僕はこれを言われたら負けだなと思っているんです。バランスが難しくて、一緒に話し合いをしている中で「私はこう思う」と言うことが憚られることがあります。「これを言うと場に大きく影響してしまうのでは」と思いながら、絞り出すこともありますし、黙ってしまうこともあります。でも黙ってしまうと、普段「みんなと一緒につくる場だよ」というのをメッセージとして発信しているのに、自分たちがそれを実践してないというのはすごく違和感がありますよね。それをみんなも感じ取るから、「スタッフはどう思うの！？」と聞いてくるんだと思うんです。そこのバランスをとりながら、その場の一員として関わっていくわけなんだけど、でもユースワーカーである時点で場に対して影響力があるんだということを自覚しながら関わっていきたいと思っているんですが、なかなかうまくいかないこともあります。

それから、機会をつくるから生まれた言葉もあるなと感じています。去年の若者会議では、行政側から HP を通して若者の声を送って欲しいという話があったときに、若者自身から「単純に送れば良いというものではなく、こういう機会（若者会議）があったからこそ、自分たちはこういう意見を出すことができたんです」という内容の話が出されていました。あと、発表の中で「今まで、大人は子どもの声を聞いてくれないと思っていました」という発言もありました。このときのフォーラムでの発表やディスカッションは一般市民や加盟団体の人に聞いてもらったのですが、そうしたら応援を表明してくれる大人がたくさんいたんですよね。それに驚いて、今まで大人が話を聞いてくれるような機会がそもそもなかったと、振り返りで話してくれた若者がいました。あるいは「通信制高校は差別される」と語った若者もいました。発表が終わった後に、加盟団体の大人と若者たちが一緒に話をする機会があったんですが、その際に通信制高校というだけでバイトの面接に行ったら鼻で笑われた経験があるんですとか、話してくれました。その子は、そういった対応になってしまう原因は、通信制高校のことを知らないからであり、だからこそ知ってもらわなければ

ならない、そのためには若者だけでなく、地域の様々な人が出入りできるフリースペースが必要で、そこで自分たちのことも知ってもらいたいし、地域のいろいろな人のことも知っていきたいと、話してくれました。なので、「日常」と、意見表明の「機会」をつくるからこそ、こういった声が出てくるのかなと思いました。

まとめに入っていきたいと思います。僕が声を聞くときに大事にしたいスタンスについてですが、まず日常や余暇がないと声は生まれないんだろうなと思っています。キーワードは「出会いと社会の拡張」かなと思っていて、最初は居場所づくりも含めて、この場所が楽しい、ここに来るといろんな活動ができるというところからスタートすると思いますが、それがだんだん「私がやりたいこと」を一緒に紡いでいくようになっていきます。それがだんだん「みんなとやりたいこと」になっていって、もっと仲間が欲しいと思うようになっていく。プロフェッショナルや地域の人に出会いたいとなったり、社会課題について考えるようになったりもしていきます。こうやって、出会いによって社会が拡張していくことが重要で、その意味で若者の声を聞くといったときに、単純に聞くだけではなくて、日常の中で多様な関わりがあるからこそ言えることが出てくるんだというのが基本だし、大事にしていきたいことかなと思っています。

あと、多次元の意見表明機会保障って、僕も上手く言語化できなくてわかりにくくなっていますが、若者たちが意見表明することで何に影響を与えるのかという問題についての話でした。これはスウェーデンの若者政策の文書に書いてあることですが、友人関係や自分の人生、学校や職場、社会の優先順位とか、多様で多次元なことが想定されるはずなんですよね。意見表明の機会やテーマは多次元に巻き起こっていく必要があると思っています。それが総体として、「私が今何をするのか」を問うことになるんじゃないかなと。だからその選択肢を、若者と一緒に作っていくということが、声を聞く先にあるのかなと思っています。

それから、大人との関係性についてですが、冒頭から若者のことを、共に社会をつくるパートナーなんだと言ってきました。でも、なりたくない大人 10 選や、許可を求める関係性が結構あったりすると思います。出張講座とかやっても、「まだ高校生だから」と言う生徒に会ったりもしますが、こういうときモヤモヤして、若者と大人の分断があるなと思ったりします。僕は、若者も大人も、お互いに自分の土俵を降りることが大事だと思っています。若者は自分が未熟だからというのではなく、大人も自分が大人としてというのではなく、どうしたら一緒により良い社会や共有地、ユースセンターはそうした場になればと思っていますが、そうした場をつくっていけるかを考えていきたいなと思っています。そしてそのために、まずできることは課題を共有することかなと思います。さっきの、首長からのトップダウンの指示とかもそうですが、今こういう課題があるんだということを共有したり、あるいは課題だけでなく、もっとこうしていきたいという共通のアジェンダのようなものを共有したりしていくことが、声を聞くためには一緒にやっていく必要があるのかなと思います。そして、社会の一員であるという手触りを感じられるようにしていくことが必要だと思います。例えば、大学生の頃に、高校生に「学校の校則を自分たちで決めて良いと言われたらやりたいか」と聞いたことがありますが、「それは責任が重くてやりたくない」と言われたことがあります。それをスウェーデンのユースワーカーに相談したことがあるんですが、そのときは「社会の一部であるということを感じられることが必要なんだ」と助言してもらったことがありました。つまりその子にとって、自分が学校という場の一部であるということを感じられていない

ということで、例えばスウェーデンでは給食を自分たちで決めるとかやってるみたいですが、そうした取り組みを通して自分がその場の一員であるという手触りを一緒につくっていくことが大事になるということです。これは、声を聞くだけで終わらないということですよね、聞いてから一緒にどうしていくかを考えてくいくことが大事なんだろうなと思っています。

最後に、I message であることが大事だと思っています。先ほどの会議の話でもそうですが、「これを伝えて良いのか、誘導にならないか」と悩むことがありますが、そこで何も言わないとか、参加しないことを選ぶと、場の停滞のリスクが生じますし、「スタッフはどう思うの！？」という聞きたくない言葉を言われてしまったりします。一緒にパートナーとして、共にこの場をつくる一員として、対等な立場で関わっていくためには、対等であるという日常の信頼関係の構築が必要で、そのうえで「私はこう思う」といったメッセージの伝え方が大事になってきます。伝えながら、若者たちがどう動くかを積極的に待つということが大事なんだろうなと思います。

ご清聴ありがとうございました、以上です。

大山：　櫻井さん、ありがとうございました。では続けて、村野さんからお話しをいただこうと思います。村野さんは今、埼玉県入間市で子育て支援関係の取り組みをされています。ではよろしくお願いします。

村野：　よろしくお願いします。私は埼玉県入間市で子育て支援センターの理事をしています。今日は AIKURU FREE BASE（アイクル フリー ベース）という、子育て支援センターがやっている若者の居場所について紹介をさせていただきます。画面に表示しているのは、昨年度の利用者が描いてくれた、AIKURU FREE BASE のチラシです。カードゲームをしたり、おしゃべりをしたりしている若者の様子を表現した絵が描かれていて、その下に「今日は少しだけ　特別な楽しいをしよう。」という文言がありますが、これはイラストとは別の利用者の女の子が考えてくれたものです。対象は中学生以上の若者で、参加費無料、申し込みは不要。子育て支援センターがお休みのときはやっていませんが、週に一回やっています。

まず運営母体となっている NPO 法人についてですが、2004 年 2 月に設立し、同年 6 月から「子育て支援センターあいくる」を運営しています。子育て支援センターは主に 0〜3 歳児とその保護者が遊びに来る施設で、国が中学校区に一つ設置することを目標に推進しています。2009 年から出張広場という形で、神社や公民館をお借りして実施する事業もスタートしました。2022 年現在は 3 ヵ所の常設広場、6 ヵ所の出張広場、週一回ずつ遊びに行く広場を運営しています。

NPO 法人 AIKURU では、子育てを中心に様々な課題に取り組んできました。そもそもの課題は子育て親子の孤立を防ごうというところから広場をはじめ、その後一時預かり事業や子ども食堂、利用者支援事業（専門機関と繋がる窓口としての事業)、次世代育成事業等を展開してきています。

法人の事業は三本の柱で考えていて、「今を大切にすること」「未来へつなげること」「地域に暮らすこと」を前提に様々な取り組みをしています。そんな中で、若者の居場所である AIKURU FREE BASE を始めたのは、入間市内に若者が気軽に集まれる場所がないことが課題となったからです。もともと乳幼児を抱えた保護者からの相談対応はしていたのですが、活動期間が長くなるにつれて、成長した子どもに関する相談や、子ども本人からの相談が増えてきました。その内容は、いじめや不登校に関するものなど様々でした。それと同時に、私の周りに生きづらさを抱えた若者

が増えてきて、当初は自宅を開放して対応していたのですが、多くなりすぎて対応しきれなくなり、支援センターの夜の時間を貸してくれないかとお願いし、支援センターの夜に開催することになりました。

AIKURU FREE BASE は 2020 年の 8 月に始まりました。2021 年度までは月に 1 回最終金曜日の開催でしたが、参加者がとても増えてきたことと、コロナもおさまってきたかなと思われたことから、2022 年度からは毎週金曜日の 17 時から 21 時に開催するようになりました。活動内容は、勉強、おしゃべり、ボードゲーム、音楽、ダンス、調理、食事など、オスキニドウゾとしています。スタッフは AIKURU のスタッフ 2 名で、一人は私、もう一人は矢野という男性スタッフがおります。彼はプレーワーカーとして各地で働いていた経験があります。この他ボランティアとして関わってくれている人がいて、AIKURU のスタッフや、社会人スタッフとして 22〜3 の若者たちが面白がって遊びに来てくれたり、大学院で心理士になる勉強をしている人が来てくれたりします。地域の方々にもご協力いただいていて、様々な食品をいただいたりしています。クリスマス会でビンゴゲームやりたいから景品くださいと、若者が SNS で発信したら、たくさん集まったということもありました。入り口の受付には、その日にもらったジュースやお菓子が置いてあって、自由に飲食できるようになっています。

AIKURU FREE BASE の決まりは一つだけ、「原状復帰」だけです。原状復帰というのは、例えば床にジュースをこぼしても掃除できるけど、窓を割ったら戻らない、戻らないことはしないでくれというのを、こちら側が提示した決まりにしています。必要になったらその時々で決まりをつくってねと、若者に伝えています。

何をしているのかといえばボードゲームが多いんですが、私がボードゲーム好きなのでスーツケースに一杯分くらいのゲームを毎回もっていって、それをみんなでやっていることが多いです。ただ、最初から大人数でやっているわけではなく、初めてきた子とかはだいたいスマホでゲームを始めるんですよね。例えばこの子たち（写真で男の子 2 人を示す）は最初スマホでゲームをしていたんですが、高校生の女の子が一人で、近くでボードゲームを始めたりするんですよ。そうすると楽しそうだなと乗ってきて、大人数でやるようになっていたりします。あと、カードゲームをしているすぐ横で勉強をしている子もいます。盛り上がっている横で勉強していることもあって、（写真を示して）勉強を教えているのは近くの銀行に勤める社会人 1 年目の若者です。仕事はそんなに楽しくないから、ここに楽しみを見つけに来ても良いですかと言って遊びに来てくれています。この子は若者と大人の中間みたいな、とても面白い存在でいてくれるんですが、写真で勉強を教えている子は小学 5 年生です。中学生以上の場になぜいるかというと、小さいときから子育て支援センターに遊びに来ていて、小学 4 年生から学校に行けなくなっています。お母さんから、習い事も全部やめてしまい、学校にも行けない、家から全く出ないのだが、AIKURU なら知っているスタッフもいるし来たがると思うので、来ても良いかという相談を受けました。その時に私は、いつも来ている若者に、「こういう相談があったんだけどどう思う？」と聞いたら、「そんなの断る理由はないよね」と言ってくれたので、そのまま伝えて、毎週来るようになっています。

それから、これ（写真）はダブルダッチをしている様子で、支援センターの目の前が商業施設の駐輪場なのですが、自転車がないときはそこで縄跳びやバスケをやっています。商業施設には、金曜の夜は若者が遊んでいることがありますと言ってあります。

それからこれ（写真）は調理の様子です。毎回夕飯を出すことにしていますが、作っても作らなくても良いと思っています。子ども食堂ネットワークからレトルト食品をたくさんもらっているのだが、調理をしたい子がいるときはするようにしています。近隣の方からいただいた食材があるときは、これを使って欲しいと伝えるようにしていますが、それ以外は自分たちでメニューも考えています。写真に写っているのは学校に行くことができず、お母さんから相談があって来るようになっている子ですが、彼がとても料理が上手で、料理を介していろいろな人とコミュニケーションをとるようになっています。だいたい彼が中心となって美味しい料理を作っています。

これ（写真）は少し前にやった闇鍋の様子です。闇鍋をやって面白い発見があったんですが、一人一つ食材を持ってきてと言ったら、意外とみんなまともなものしか持ってこなかったんですが、二人菓子パンやお菓子を持ってきた子がいました。よそったものは食べなければならないというルールでやったんですが、そのお菓子とかが美味しいとは思えなかったんです。でも一人だけ、美味しいと言ってたくさん食べた子がいたんですが、その子は初めて来たときに食事の時間に泣いて、しょっぱくて食べられないと言っていた子だったんです。その子の味覚が塩味等の調味料に対してとても敏感だってことはそのときにわかっていたんですが、お菓子の闇鍋を美味しいと言ったことで、甘みを美味しいと感じているんだということを全員が理解して、その次の機会から食事の際にみんなの意識が変わったんです。「これしょっぱくない？」という声掛けがされるようになったりして、闇鍋もやって良かったなと思っています。

食事はいろいろなメニューがあって、誰かが誕生日のときにはホットケーキに飾り付けてお祝いをしたりもしています。そのときに、紙皿をめぐる事件があって、中学生男子たちが紙皿をどうしても床に置いてしまうんですが、踏んでしまうのでやめて欲しいと高校生の女子から意見が出たんです。そのときは「わかった」と言うんですが、食べてるとどうしても床に置いてしまうんです。そうしたら女子高生が、ここに決まりがなく、必要なら決まりをつくりましょうと言ってることをわかってる子だったので、「そんなにできないんだったら、紙皿は床の上に置いてはいけませんって決まりを作るからね」って言ったんです。そうしたら男の子たちが「決まりだったらやります」と言ったら、女子高生が「決まりだったらできるのに、誰かが嫌な思いをしててもできないのはおかしい」と訴え始めて、「学校でも、校則がこうと決まったら守るんでしょう。でも、私が今嫌な思いをしているからやめてくれというお願いは聞けないというのはどういうことなんだ」と怒り出したんです。「決まりはこうやってできていくんだ」と彼女は訴えていて、「決まりだから守るんじゃなくて、みんなが楽しく過ごせるように守るということができないのか」と怒っていることがありました。結局、紙皿のルールは今もできていません。守れていません。これからどうなっていくのかなと注目しています。

やりたいことのアンケートをとることもあって、昨年度の終わりにはゲーム大会をすることになりました。最初はスマブラ大会をしたいといって、何人かで switch を持ち寄って、コントローラーが何個集まればできるって話してたんですが、それは集まらなくて実現しなかったんです。代わりにカバディっていう遊びをみんなでやって、盛り上がっていました。

さっきの櫻井さんの話を聞いていて、「日常があって機会があるから若者の声が聞ける」っていうのはこういうことかなと思った、その「機会」がこれです。地元のラジオの方が取材に来てくれたことがあったんですが、一回目は何人かの子どもたちがスタジオに行って、FREE BASE ってこ

ういうところですというのを質問に答える形で話してきました。その後実際に見に来てくれて、若者が何でもない雑談をしているところを見たラジオ関係者の人が、この若者たちの言葉がすごく面白いから、一つ番組を持ったらどうかと言ってくれたんです。月に一回放送するから、好きなことを 10 分×2 回話して欲しいって話になったんです。これに女の子 3 人が、とても楽しそうだからやりたいと言って、構想を練り始めました。それを他のメンバーに、こういうことをやりたいんだけど、と伝えたところ、男子高校生から、好きにしてていい場所なのに、なんでそんな決まったことをしなければいけないんだと意見が出たんです。反対をしたわけではなくて、純粋に疑問として、どうしてそんな課題のようなことに取り組まなければならないのかという意見だったんですが、そこでこのラジオ収録が一回頓挫したわけです。で、ラジオのパーソナリティーさんにお伝えしたら、「待ちます」って言ってくださったんです。待っててもらったら、先々週に「なんでそんなことをやらなければいけないんだ」と言った男の子が、ラジオをやりたがった女の子たちに、「学校の先生にこの話したら、お題もらってきたからやろう」って突然言ったんです。だけど、全員でやらなくて良い、やりたい人だけやろうということになりました。彼の担任が出したお題が、「学校のことをどう思ってるの？」というもので、これについてみんなが好き勝手話したんですが、その中に「いじめられている子がいたので先生に話したのに、何にも聞いてもらえなかった話」とか、「トイレで女の子たちがたまって文句言ってるのは何なんだろう」とか、面白い話がいっぱい出てきて、ラジオの人に送ったんです。送ったのもこの子たちが直接やったんですが、すごく面白いものができそうだって喜んでくれていました。このラジオ収録は今後も月に一回やると言っていました。

そしてこれ（写真）が原状復帰の掃除の様子です。子育て支援センターなので、まだはいはいの赤ちゃんとかも来るから、小さなゴミも残さないで欲しいということを、私が頼んでいます。それで雑巾がけをしたり、棚の上を拭いたり、がんばって原状復帰してくれています。

こんな AIKURU FREE BASE ですが、運営者は誰なのかという話が今年度の 4 月に出ました。場所を設けてるのは NPO 法人 AIKURU ですが、オスキニドウゾの場所なので、場を作る中心になるのは若者たちであって欲しいと思っています。私は何となくそこにいるおばちゃんだと思っています。今日は何をしようって誘うこともないし、他の人と同じようにしゃべって、そこにいます。若者たちに運営しているという意識があるかどうかも分かっていなかったんですが、今年の 4 月に高校生になった子が、4 月になって初めて来たときに、「今日から俺、高校生だから、運営側だよね」って言ったんです。これに運営に関するようなことをやっていた年上の、18 歳くらいの子たちがすごく驚いて、「運営側ってどういうこと？」って聞いたところ、「今まで自分たちが居やすいようあなたたちが場所を作ってくれてたでしょ？　それは高校生だからじゃないの？　高校生になったから、俺もそっち側のことをやるんだと思ってきた」と言ってくれたんです。そうしたら 18 歳くらいの子たちが、「自分たちはこの場が楽しくなるようにいろいろ考えてやってきたけど、それが伝わっていたんだ」ということにとても喜んで、「じゃあ運営会議をしよう」って言って、突然運営会議を始めたんです。そのときに出たのが、「やりたいことを自分たちの手で実現しよう」っていう話でした。そのときに出た「やりたいこと」が、スポーツ大会・釣り大会・陶芸体験で、これを実現させるにはどうしたら良いのかを調べたりしながら進めていて、スポーツ大会と釣り大会は 8 月に実現することになっています。陶芸体験は交渉の手前まで来ています。こうい

うことを、「やりたい」というだけでなく、自分たちの手で実現させていこうということを、今話しているところです。

駆け足で話しましたが、以上です。ありがとうございました。

大山：　ありがとうございます。この後は意見交換をしていきたいのですが、その前に櫻井さんと村野さんがそれぞれの報告をどう聞かれたのかを聞いてみたいと思います。まず、村野さんから櫻井さんの話をどう聞かれたのかうかがっても良いですか。先ほども櫻井さんの話に言及されていたところがありましたが。

村野：　すごく面白いなと思って聞かせていただきました。「こんな大人になりたくない 10 選」、その通りだなと思って聞いていたんですが、そんな大人になってしまう瞬間ってないですか？

櫻井：　だからこそ、自戒を込めてと言ったんですが、なってしまって反省するんですよね。でも、反省をワーカーたちで共有できるということを大事にしています。だから活動の後は、スタッフのそれぞれの動きがどうだったかについて話し合う時間を作っています。「あのときの俺、威圧感なかった？」「あったよね～」みたいなことをみんなで共有して、あのときはこんな声掛けが良かったかな、とかをみんなで考えています。

村野：　特に、「ありのまま信者の大人」の話、これはすごく難しいなと思っていて、例えば不登校の子とかいますが、一歩踏み出そうとするところは応援したいし、それが少し無理をしてるなと思っても、本人が頑張ろうとしているところは応援したいじゃないですか。それがそのときのその子の「ありのまま」だと思っていて、もし戻ってきたいと思うのであれば戻れば良いし。ここは背中を押したい、ここは待っていたいという見極めをどのようにしているのかを聞きたいです。

櫻井：　とても難しくて、僕も悩むところ。基本的には「こうありたい」という願いがあるんだったらそれを尊重したい。ただ、あんまり背中を押すってあまりしない、一緒に考えて「こうだったら、良いよな～」とか、「それはわかるよ」とか、「どういうふうにしていきたいの」とか、そんなニュアンスで関わっている。そのうえで、村野さんがおっしゃったように、エネルギーを使い果たしたときとかにすぐ戻って来られるようにしたいし、大変になって落ち込んだりしないように守ろうみたいなことはしたくないと思っています。

村野：　すみません、退出しなければならない人が出てきてしまいました。その方からのご意見をいただければと思うのですが。

F　：　ありがとうございます。ここで失礼しなければならず残念です。一つ思ったのは、NPO なりの団体には理事とかの大人の集団があると思うんですが、今日うかがった事例では非常に主体的に展開している子どもたちの取り組みを皆さんでサポートされてるなと感じました。これを支える大人は、どういった人が何人くらいいらっしゃるのか、活動を支える大人についてお聞きしたいと思いました。

櫻井：　うちには加盟団体が 33 あると言いましたが、それぞれに得意分野があるので、それぞれの関わりたいやり方をしているのが現状かと思います。村野さんのお話を聞いてすごいなと思ったところでもありますが、それをもう少し地域社会を巻き込むように展開していきたいと思っています。

村野：　私のところは逆に専門家がいないんです。地域のおじいちゃんおばあちゃんはいるんですが、専門家がいないのが問題だと思っています。「こんな大人は嫌だ」に当てはまりそうな人も、地域の人の中には結構いるんですね、だから「そんなこと言わないでよ」と言える若者が育つと良いなと

は思っています。

F　：　ありがとうございます。とてもよくわかります。今日はこれで失礼します。

村野：　続きですが、きっと皆さんも知りたいと思うところではないかと思いますが、「スタッフはどう思うの！？」と聞かれたら、言われちゃったと思うという話がありましたが、これはスタッフの出方を気にされている所が問題だと思っているということでしょうか。そこの場の一員だと思われてるからこそ聞かれる「どう思ってるの！？」もあるじゃないですか。

櫻井：　議論が煮詰まっているときの、助けを求めるというか、「スタッフ決めて」みたいなニュアンスが含まれる「スタッフはどう思うの！？」ですね。この背景には、その場をみんなと一緒に作る場なんだよと普段から言っているけれど、僕ら自身がそういう動きをできていないということがあるんですよね。みんなと一緒に作るのであれば、アイ・メッセージとして僕らの考えを伝えていきながら、一緒に考えていくというのが理想としてあるんですが、多分そう言われるときは黙り過ぎてるというのと、言えば何とかしてもらえると思われてるってことですよね。だから、日常の中で「やってもらえる」空気・文化ができてしまっているからこういう問いが生まれるんだろうなと。

村野：　なるほど、よくわかりました。

大山：　それでは、逆に櫻井さんは村野さんのお話をどのように聞いていたのでしょうか。

櫻井：　まず感想として、僕は専門家がいないことの大事さが大きいと思っていて、そこを地域社会の中で様々な担い手が若者たちを支えようとしてくれていて、若者もそれを理解していて、頼る先があるということが伝わっていることが、僕らに足りない部分でもあるし、今後も頑張っていきたいと思ったところでした。

お話の中でラジオ収録がありましたが、ラジオってすごく良いツールだと思っていて、僕も昔若者たちとラジオをやっていたことがあるんです。ラジオを始めた途端に急にみんな自由に話し出した経験があって、ツールとしてもすごく良いだけでなく、地域のラジオをやっていらっしゃる方々が若者の声を待ってくれるのもすごいことですよね。そこから「学校のことどう思ってる？」ってすごく良いテーマだなと思って、うちでやってもいろいろな意見が出てきそうだなと思っていました。

あと、「高校生だから運営側だよね」って言って、運営会議が始まった話で、運営会議そのものも若者たち自身から生まれてくるってことがすごいなと思ったんです。僕らのところの会議ってあくまで機会をつくるために僕らが設定したものだったりするんですけど、それが高校生たちから生まれてくるのはすごいと思いました。先ほどの説明の中でも、中学生にとって高校生が場を作ってくれていたんだと見ていたという話がありましたが、そういった取り組みはどんな場作りの中から生まれてきたのか気になります。

村野：　「運営側だよね」って言葉は私たちも、多分 18 歳の子たちも予測してなかったので、本当に嬉しかったんだろうと思うんです。ここまで 1 年半くらいかかっていますが、その間この 18 歳くらいの子たちがやっていたのは、とにかく入ってきた子に声をかけるということなんです。もともと私の家に集まっていた、困りごとを抱えていた子たちがその年代ですが、彼らは場所が AIKURU に変わったことをとても喜んでくれたんです。やっぱり人の家に集まるって気を遣うところがあって、公的というかどうどうと集まれる場所ができたのならそこを大事にしたいという思いがあったんだと思うんです。来た時にみんなが嫌な気持ちをしないようにとか。あと、スタッフの男性

が言っていたことですが、若者たちの距離感が絶妙なんですよね、べたべたするわけでもほっておくわけでもない、スタッフが驚くくらいの感じでやっています。多分自分たちがして欲しいことをしているんだと思います。ほっておくわけでも構うわけでもない、最後の方にゲームの声掛けをするのも、何を食べるか聞くのもその子たちがやってたんですが、特別なことをやってたわけではないと思います。

あと、来てる子たちの中には学校が楽しくて友だちもたくさんいるという子から、全く学校に行っていないという子まで、本当にいろいろな人がいます。これが不登校の子だけの場所だったりしたらまた違ったかと思いますが、いろいろな子がいて当たり前の場になっているので、誰がどんな事情を抱えているかはみんな知らないんです、学校も違うので。そんな中で 20 代前半の新社会人の若者とかが、全く気にしないで「学校行ってないの？何で？」とか聞きだしたりするんですよね。それは私たちだと聞けないことじゃないですか、でもまったく気にしない人もいたりして、誰でもいられる空間であるということが、こういった雰囲気につながっているのかなと思います。

櫻井：　ありがとうございます。今僕らのところに来ている子たちは、「もっと仲間が欲しい」みたいは話をしていて、駅前での活動とかやっているんですが、一生懸命宣伝やってるわりには新しく来た子に声をかけられないなんて意見も振り返りでは出ていたんです。そのあたりの場のつくり方が、やっぱりずっと場を共有してきた若者たちだからってことと、自分たちが居心地良い場所だからそれを自分たち自身がそのままやるってことにつながっているのかなと思って、なるほどと思って聞いていました。

大山：　ありがとうございます。あと一つお二人にお聞きしたいことがあります。今回のテーマが子ども・若者の声にどう向き合うのかということになっていますが、社会とのつながりを考えると、スタッフに限らず大人との関係性をどう考えるかがすごく大事だと思っています。村野さんのお話しで、ラジオ関係者が子どもの声を待ってくれたエピソードはとても大事なことを示唆してくれていると思うのですが、櫻井さんの「土俵を降りる」という話とも関わりますが、子ども・若者の声が社会に届いていくプロセスについて、どのようなイメージがあるかお聞きできればと思います。

櫻井：　すごく難しい話ではありますが、僕の中ではこれから若者たちと一緒に取り組もうと思っているユースセンターづくりが、地域社会の中の共有地にしていきたいと思っていますし、それがネットワークとして取り組んでいく価値だろうと思っているんです。33 の個人・団体が集まっている中で、どこか特定の団体が所有している場所ではないわけですよね、ネットワークとしてもっている場所になるので。そういう場を、大人も若者も一緒に共有地として作っていく、こういう場だったら私たちも、若者にとっても、大人にとっても過ごしやすいよね、と。そういう関係づくりを、このユースセンターづくりの取り組みの中でやっていきたいと思っています。具体的には、若者会議が中心となってユースセンターのイメージづくりとかをしていくんですけど、その中でワークショップを地域に開いてやろうかなと思っています。その中でできあがってくるイメージを、古民家の土間のような、若者のためのスペースと大人のスペースが入り混じるような、大人の人たちが、ここが若者のための場だと知らずに入って来られるような場にしていきたいと思っていて、そこで若者と出会って話をするということそれ自体が、若者の声を聞くということの第一歩だと思います。そうした関係性によって、さっきのラジオの話のように、一緒に若者の取り組みを支えて

いく人になっていくのかなと。

総じて出会いの重要性でもあって、若者と大人がなぜ分断されるかというと、これは若者と大人に限った話ではなく社会の中の分断全般に言えることだと思いますが、お互いを知らないことによって生じると思うので、まずはお互いを知り合っていく場を日常の中でつくっていくことを大事にしていければと思っています。

村野：　私はまだ若者の声を社会につなげるとかの活動には至っていないと思いますが、例えばさっきラジオの話で、学校の名前と本名はラジオだから言わないということにしていたんです。そうしたら普段口数が少ない中学生が、自分は小学 2 年生から学校に行ってないから、学校のことは何も話せないと言ったんです。ラジオ収録が停まった後に、本人は「あれは言って良かったですか」と周りに聞いてきたんです。周りは「大丈夫だよ、言いたくなかったのなら編集もできるよ」と言ったら、「言いたかったんだけど、今まで誰にも言ったことがなかったことで、言ったらみんながひいちゃうんじゃないかと思った」と言って、それに対して周りの子は「大丈夫だよ、私も行ってなかったし」とか話して、その場はとても良い感じだったんです。

今回はラジオだったけど、いろいろなツールを使って自分がいつもは言えないけど本当は言いたいことを発信していければ良いなと思っていますが、その先にどこにつなげたいとか、その辺はまだ私も迷っています。例えば入間市には若者会議のようなものはまだないんです。例えば 2 年くらい前にコロナになって、学校が臨時休校になったけど子どもたちはどうしているんだろうという質問が青少年課から、子育て支援センターをやっていた私に来たんです。どうして私なんだろうと思って聞いてみたら、若者の生の声を聞く場を入間市は何も持っていなかったんです。そのときの青少年課の課長さんはすごくそこに問題意識を持ってくれていたんですが、この前その人が異動しちゃったんです。若者がやりたいことが、例えば行政とかとつなげる必要があるんだったらやれば良いと思うんですが、若者自身が求めてもいないのにやるべきかには疑問があります。ただ、こういう場が必要だとは思っているので、訴えてはいこうと思っています。あるいは若者たち自身が、「こういう意見があるから市長に言おう」となったら、そこからつなげたら良いかなと思っています。

大山：　ありがとうございます。今回のテーマに照らし合わせても非常に示唆に富んだご意見をいただけたと思います。ここからは質問や意見交換をしていければと思いますが、いかがでしょうか。

井上：　ありがとうございました。とても良いお話を聞けました。子ども・若者のことを考えると、児童館はどうなっているんだろうと思ったんです。私は西東京市にいたことがあって、そこは東京都で初めて児童館ができたところで、若者が大勢遊びに来ていました。たむろする場にも、職員と交流する場にもなっていましたが、そういう場はなかったのでしょうか。

櫻井：　児童館については、郡山市にはないです。児童館に類する児童センターが 1 ヵ所ありますが、ここは「皆さん並んでください、ピッ」みたいなところで、世田谷にいた私がイメージする児童館像からはかけ離れた場所になっています。あと郡山市は乳幼児対応を頑張っていて、原発事故もあったので屋内での乳幼児向けのあそび場はいくつかつくられています。ただ、プレーパークで育った僕からすると不十分だと感じるところも多いです。

C　：　すごく共感する部分が多く、楽しみながら聞いていたんですが、若者自身を主語にしていただけるので、僕としても聞きやすいなと思っていました。一つ気になったのは、村野さんが先ほど専門

家がいないと言っていて、櫻井さんはそれが逆に良いんだという話をしていましたが、私も現場がありますがそうした職員というのはある種専門家的な存在として見られがちかと思うんです。そうなるとある種の権威性を帯びたりするので、極力それを外して、支援者にならないようにしたいとも思うんですが、逆にこういう意味での専門家が欲しい、みたいなところが村野さんの中にあるのかなと思いまして、そこをお聞きしたいです。それを聞いたうえで、櫻井さん的にはどう思ったのかも併せて聞いてみたいです。

村野：　この専門家をめぐるところは話したかったので嬉しい質問です。私は、あえて言えば自分自身は子育て支援の専門家だと思うんです。23 年間やってきて、保護者の相談にのるとか、乳幼児の発達とか、そういうところはある程度わかっているんですが、例えば不登校の子にどう向き合うのかとかわからなくて、その子にただただ寄り添うみたいな接し方をしています。

　最近、対応できるのか悩んだ事例があって、その子の通っている学校と、地域の保健士さんと、家庭指導相談員さんみんなに連絡をとって、ケース会議を設けてもらったんですが、その時にどうしたら良かったんだろうと困りました。私たちにはユースワーカーという人もいないですし、どうしたらいいんだろうと悩んだときに専門家の必要性を感じたんですが、どうでしょうか櫻井さん。

櫻井：　僕がやっている民設民営の場所だったら、その子がもう一度ここに来るということに注力します。ただ、もう一度来てもらうというのが第一なんですが、それと同時に現在の自分をどのようにとらえるのかを一緒に話し合っていく必要があるとも思います。そこでお互いに合意を得た上で、リスクがある場合には他の専門家に来てもらうこともあるかもしれないよ、ということを確認・共有しておくことが、最初の 1～2 回の来所時に必要かな。そのうえで、その場を共にする専門家が必要かと言われると、僕は資格があるからそういうことができるとは全く思わないんです。ユースワーカーも資格があるわけではないので、スタッフをスタッフたらしめているのは、やはり事後の振り返りと、自分たちの支援哲学を共有して毎回確認していくこと、これが専門性なんだろうなと思っているんです。資格を持っているのは別にいいんですけど、そのことが解決策になるとは全く思わないので、自分たちの団体・組織としての専門性をどのように形作っていくかが大事で、その意味での専門性は AIKURU の皆さんにはあるんじゃないかなって思って聞いていました。

村野：　ありがとうございます。それこそ、もう一度ここに来て欲しいという思いだけでやってるようなものなので。

C　：　ありがとうございます。大事にしているスタンスの違いって絶対に出てくると思っていて、例えば来所する若者たちの視点から見るって考えるのか、問題を解決するって視点から見るのかで、違うことやる人もいて当たり前だと思うんですよね。哲学とか倫理観みたいなものかもしれないですけど、それが違う場合はそうなり得ると思いますが、子どもや若者を真ん中に置くってことは、そこから始まるってことになると思うんです。それを見ようとしているという意味で、村野さんのところは専門性があるんじゃないかと、僕も思っていたところでした。

　一方で、「支援者だから」ではなく、「一人の人として見過ごせない」みたいな思いもきっとあるんだと思うんです。その葛藤がありながらの関わりだと思いました。櫻井さんの「振り返りながら関わる」というのも、まさにそうだなと思いながら聞いていました。

大山：　今の話は、社会教育の専門性とも関わる気がしました。様々なテーマについて学習支援をしますが、一つ一つのテーマについては専門家ではなくて、その都度講師を呼んできたりするわけです

が、そのときに我々は何の専門家なんだろうかって考えたりするわけですよね。そうすると、地域住民の中に入って、皆さんの生活に伴走し、聞き取りをし、そこから見えてきたものを一緒に考えましょうと、種をまくような関わり方をしてきたように思うんですが、これは櫻井さんがおっしゃっていたように専門家として権威的に関わると成立しないんですよね。「日常」は今日のキーワードだと思いましたが、いかに日常の中に入っていくかがとても大事なんだなと思いましたし、そこでは今の日本で「専門家」と言われるときにイメージされるものとは少し違う「専門」のあり方が問われるように思いました。

井上：　児童館の話から専門性の話につなげると、児童館の職員は子どもの発達に関する専門性があるとされていた時期がありましたが、今は生活・時代そのものを把握しながら子どもたちの成長にどのように関わり続けるかが問われるようになってきています。そうすると村野さんの関わり方は専門性がある、その子にあった関わりは接していく中で見出していくしかないわけですよね、それを発信する場がないだけじゃないかという気もします。櫻井さんも地域をつかんで、子どもたちの成長に寄与しようとしている。だから、専門性とつけたかったら、子どもたちをつかむ力量や成長を促す力量、その辺りしかないのではないかと思います。

櫻井：　僕は、子どもたちを成長させようとは全く思ってないです。ただ、余暇の機会と参加の機会を保障したいだけなんです。その中で若者たちが成長するかどうかは副産物です。結果として成長したね、となることはありますけど、僕は、目の前の若者たちが豊かな余暇の時間を過ごすことができるようにしていることと、自分たちの声を発信する機会をつくるということをやっているだけです。

井上：　それが子どもたちを成長させることにつながるのでは。

櫻井：　それは副産物だと思っています。

大山：　C さんからチャットで今の議論についてご意見をいただいています。「目的とするか結果として生まれるかは別視点のものになる。」というのは、私もその通りかと思います。

　まだお話しいただいていない方からも、できればご感想やご質問等あればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

A　：　もともと私たちはヨーロッパのユースセンターを回っていて、今は日本のユースセンターを見ようと思って、先日櫻井さんのところにもうかがわせていただきました。今日、櫻井さんの哲学をうかがって、あのとき見たものがこういった哲学によって生み出されているんだなと思いました。「なりたくない大人 10 選」は結構衝撃で、そういう大人に自分たちも若者として会うことが多かったんですが、今日は勇気をもらいました。ユースワークされた感のあるイベントでした。あと村野さんのお話もうかがって、僕は埼玉が実家なので、遊びに行きます。先ほどのお話にあった、若者たちの絶妙な距離感というのを、僕自身感じてみたいなと思いました。

G　：　ありがとうございました。そういうふうにやっていきたい気持ちはあるけど、「なりたくない大人 10 選」でやってしまっていないかなと思ってしまいます。経験知としては子どもたちが見せてくれている姿が、お二人の話の中にあった子どもの姿とつながるんですが、日々の取り組みの中ではなかなかアプローチしきれない。ボランティアは様々なタイプの人がいるので、「なりたくない大人 10 選」のような人もいるんです。でも、今日聞いたような話をしっかり伝えなければいけないなと思いました。

私たちはプレーパークをやっているんですが、プレーリーダーが感じることと、ときどき入ってくる運営委員やボランティアの人が言うことが、つまり現場を見る目が違っていると感じることがあります。さっきの話にもあった、支援の軸がぶれないかという問題ですが、そもそも事後の振り返りがぶれていたら振り返りが成立しないなとか、すごくいろいろ考えさせられました。すぐには解決しないけど、こういう話を聞かせていただくことで、子どもの声を聞くとか、子ども真ん中社会とか、そんな簡単に言えることじゃないなと感じました。

E　：　お二人の実践哲学についてお聞きして、すごく興味深いなと思っていました。櫻井さんのお話しで、子ども・若者の参画によって地域に影響が派生していくというところがすごく面白いなと思っていました。子ども・若者を中心として活動していくというときに、地域住民全体の居心地の良さや居場所感がどのように上がっていくのか、子どもたちを大切にしていくということが、子どもたちだけでなくより大きなコミュニティに派生していくイメージをどのように持っているのかをうかがいたいのですが。

櫻井：　僕の中のイメージとしては、スタートは人それぞれだと思うんです。最初は自分自身が居心地の良い社会、というところからスタートする人もいるし、子どものために何かしたいというところから始まる人もいます。それらが「みんなのため」になっていくことが大事なのかなと思っています。

E　：　最終的なゴールが、みんなが居心地よい場所にしたい、になるのはわかるんですが、一方で「なりたくない大人 10 選」のように、そこまで至れなくなる要素もあるわけですよね。柔軟に、みんなの居心地の良さ、みたいな目標に至れる人とそうでない人の違いってどこにあるんだろうって思ってしまうんですが、いかがでしょうか。

村野：　本当に多様な地域の方々がボランティアに入ってくれていますが、一番の違いは「やってあげよう」という気持ちなのか、「自分がやりたい」という気持ちなのかなと思っています。自分が何をやりたいのかということが重要かなと。いろいろな人がいることは良いことで、その中で「これは余計なお世話です」と言える若者が育ったら良いなと思っています。地域の方が来た時も、私が嫌だなと思った人には、「私はその関わり方は不快です」って言うんです。でも、若者に対して、「あなたも嫌だって言いなさい」とは絶対に言わないです。私が言っているのを見て、やってくれたら良いなと思っていますが、それはまた若者たちの自由かなと思っています。

櫻井：　地域の人とのつながりという点ではまだまだ僕自身未開拓なところが多いんですが、33 の個人・団体がネットワークに集まっていると、スタンスはそれぞれですよね。村野さんがおっしゃったような、「してあげたい」という思いを強く持っている方もいらっしゃいます。でもその中で、常に議論することをやめない、そしてそれを開き続けるということが大事かなと思っていて、車座会議っていうものをずっとやっています。「僕らはこういう価値観でやってるから、これを共有してください」という形でやっているのではなくて、みんなでどうやったら子ども・若者を中心とした地域にしていけるのかという、その議論の場があることが大事なのかなと思っていました。

E　：　すみません、村野さんにあと一つ。来所した若者は、嫌な関わり方をされたときに上手に対応できるようになっているんですか？

村野：　なっていないです。ですが、この前面白いなと思ったのですが、先ほどの話でも登場した調理している男の子がいますが、彼のことをすごく褒めたたえるボランティアがいるんです。それがすご

く窮屈そうに私から見えたんですが、そしたらそれを見ていた 19 歳の子が、「その褒められ方って嬉しい？」って聞いてくれたんです。そしたら彼はノーとは言わなかったんですが、「うーん」って首をひねったんです。そしたらその大人はわかってくれたんです。本人が言えなくても、周りが言ってくれるのは良いなと思っています。

E ： ありがとうございます。その光景が想像できる気がしますし、すごく良い空間になっているんだろうなと思いました。

D ： 先ほどの議論の中で、若者は自分を未熟だと思っていて、大人は自分を大人だと思っている、その土俵から降りるという話で、私も自分のことを未熟だと思って過ごしていたことがあって、未熟だから大丈夫かなと心配しているときって全然楽しくないと思ったりもしました。未熟だし、経済的に自立しているわけでもないし、何ができるわけでもない、とか思ってしまうと、その時が準備期間のように思えてしまうことがありますが、その瞬間も自分の人生の時間の一部なので、それをみんなで作っていこうとしているところが良いなと思いました。また、それが地域の中に溶け込んでいるのがすごいと思います。

ラジオで、学校に行けてないことを言って良かったかなと言った子に対して、周りが良かったよと声をかけていた話がありましたが、そういった声掛けがあると「言ってもいいんだ」と思えると思いました。支援を通しての変化ではなく、自然にその場で自分の存在が受け入れられる場になっているということが印象的でした。

櫻井： ありがとうございます。僕らユースワーカーはスウェーデンの若者政策を参考にすることがありますが、そこでは「若者は問題か、資源か」という議論があります。若者は問題だとする立場は、若者は脆弱であり危険にさらされているので保護の必要があるとしています。一方で若者を資源としてとらえる立場では、若者は将来的に価値があるというだけでなく、若者という立場にあるだけで既に価値があるんだとしています。若者だから未熟、自分はまだ未熟と思ってしまう、その気持はすごくよくわかる一方で、このように捉えてくれる社会になったら、若者も「こうしたい」「こういう社会であって欲しい」と願えるようになるんだろうし、僕らはそういった社会にしていきたいと思っています。

僕が世田谷区の青少年協議会に関わっていたときに、すごくこだわって議論し、作成した文章があります。「一般的に子ども・若者は「次代を担う」「未来を担う」存在として語られることが多い。それではいったい、いつになったら若者は社会を担うことができるのであろうか。若者は、「今まさにこの社会を生きる主体であり、おとなとともに社会をつくる存在である」という、若者観の転換が今こそ求められているといえよう。より具体的には、若者を問題の根源としてみるのではなく、問題解決のパートナーとして捉えることである。若者のことは若者が一番知っている。」というものですが、この文章は今回のテーマである「子ども・若者の声を聞く」ということとの基盤になると思いますし、子ども・若者観の転換をしていくということが必要なんだろうと思っています。

大山： これは事前打ち合わせのときに出てきた話ですが、土俵を降りることもそうですし、子ども・若者を分断しないということがポイントかなと思います。若者だから声を聞くのではなく、誰もが言えるという環境が前提であって、そこに若者が入っていくことが必要なのかなと。事前打ち合わせでも、「子ども真ん中社会」は悪いことではないけれど、子ども「を」真ん中に置こうとすること

には違和感がある、子ども「も」一緒に真ん中にいられる社会が大事なんだろうと、事前打ち合わせのときに櫻井さんと話したことが印象に残っています。

すみません、お時間が来てしまったので、そろそろ閉会に向かおうと思うのですが、お二人から最後に一言ずついただけますか。

村野：　ありがとうございました。私は親子支援から始まっていますが、どんな人も、誰がいても当たり前になる社会にしたいと思っています。子ども・若者・大人とか関係なく、誰がいても良い社会になっていくと嬉しいです。今日はありがとうございました。

櫻井：　ありがとうございました。さっき全部言っちゃった気がしますが、僕がどうしても違和感があるのが、「まだ若者だから」とか「若造のくせに」といった言葉であったり、あるいは国や自治体の未来を考える場から若者や女性が排除されていたりする、そういうことがどうしても納得できないわけです。いろいろな人と出会ってきたし、その人たちと一緒にこの社会が作られていったら、もう少しマシになるんじゃないかと思うんです。これからも、僕の中でのテーマは「若者」ですが、村野さんのお話しにもあったように、そこにこだわるわけじゃなく、みんなと一緒につくる社会が実現できるように頑張っていきたいと思います。ここで出会えた皆さんもご縁ですし、ぜひ一緒に考えていきましょう。

大山：　ありがとうございます。そうしたら当法人の理事長の小木先生から閉会の言葉をいただければと思います。

小木：　長時間にわたってお二人ともありがとうございました。時間を長くとれたこともあって、議論もしっかりできたんじゃないかと思います。印象に残ったのは、お二人とも常に試行錯誤しながら進められていた点です。驚いただけで終わることも多いんですが、それをどうすれば良いのかと常に考えているところがすごいなと思います。

大山：　それではお時間になりましたので、これで閉会といたします。今日はありがとうございました。